

「教育サービス面における社会貢献」評価報告書

(平成12年度着手 全学テーマ別評価)

国立遺伝学研究所

平成14年3月

大学評価・学位授与機構

大学評価・学位授与機構が行う大学評価

大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

1 評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は、大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう、大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより、その教育研究活動等の改善に役立てるとともに、評価結果を社会に公表することにより、公共的機関としての大学等の諸活動について、広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

2 評価の区分

機構の実施する評価は、平成 14 年度中の着手までを段階的実施(試行)期間としており、今回報告する平成 12 年度着手分については、以下の 3 区分で、記載のテーマ及び分野で実施した。

全学テーマ別評価（「教育サービス面における社会貢献」）

分野別教育評価（「理学系」、「医学系（医学）」）

分野別研究評価（「理学系」、「医学系（医学）」）

3 目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は、大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう、当該大学等の設定した目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため、大学等の設置の趣旨、歴史や伝統、人的・物的条件、地理的条件、将来計画などを考慮して、明確かつ具体的な目的及び目標が設定されることを前提とした。

全学テーマ別評価「教育サービス面における社会貢献」について

1 評価の対象

本テーマでは、大学等が行っている教育面での社会貢献活動のうち、正規の課程に在籍する学生以外の者に対する教育活動及び学習機会の提供について、全機関的組織で行われている活動及び全機関的な方針の下に学部やその他の部局で行われている活動を対象とした。

対象機関は、設置者（文部科学省）から要請のあった、国立大学（政策研究大学院大学及び短期大学を除く 98 大学）及び大学共同利用機関（総合地球環境学研究所を除く 14 機関）とした。

各大学等における本テーマに関する活動の「とらえ方」、「目的及び目標」及び「具体的な取組の現状」については、「教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標」に掲げている。

2 評価の内容・方法

評価は、大学等の現在の活動状況について、過去 5 年間の状況の分析を通じて、次の 3 項目の項目別評価によ

り実施した。

- 1) 目的及び目標を達成するための取組
- 2) 目的及び目標の達成状況
- 3) 改善のためのシステム

3 評価のプロセス

大学等においては、機構の示す要項に基づき自己評価を行い、自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を機構に提出した。

機構においては、専門委員会の下に、専門委員会委員及び評価員による評価チームを編成し、自己評価書の書面調査及びヒアリングの結果を踏まえて評価を行い、その結果を専門委員会では取りまとめた上、大学評価委員会で評価結果を決定した。

機構は、評価結果に対する意見の申立ての機会を設け、申立てがあった大学等について、大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

4 本報告書の内容

「対象機関の現況」及び「教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標」は、当該大学等から提出された自己評価書から転載している。

「評価結果」は、評価項目ごとに、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として記述している。

また、「貢献（達成又は機能）の状況（水準）」として、以下の 4 種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いている。

- ・十分に貢献（達成又は機能）している。
- ・おおむね貢献（達成又は機能）しているが、改善の余地もある。
- ・ある程度貢献（達成又は機能）しているが、改善の必要がある。
- ・貢献しておらず（達成又は整備が不十分であり）、大幅な改善の必要がある。

なお、これらの水準は、当該大学等の設定した目的及び目標に対するものであり、相対比較することは意味を持たない。

また、総合的評価については、各評価項目を通じた事柄や全体を見たときに指摘できる事柄について評価を行うこととしていたが、この評価に該当する事柄が得られなかったため、総合的評価としての記述は行わないこととした。

「評価結果の概要」は、評価結果を要約して示している。

「意見の申立て及びその対応」は、評価結果に対する意見の申立てがあった大学等について、その内容とそれへの対応を示している。

5 本報告書の公表

本報告書は、大学等及びその設置者に提供するとともに、広く社会に公表している。

対象機関の現況

【機関名】

国立遺伝学研究所

【所在地】

静岡県三島市谷田 1,111

【概要】

設置の目的

遺伝学の基礎とその応用に関する総合的研究を行い、併せて大学における学術研究の発展に資することを目的として設置された大学共同利用機関である。

共同利用

全国の研究者のために共同利用の機会を提供し、また、そのための施設の利用に応ずる。

大学院教育

総合研究大学院大学（総研大）生命科学研究科の遺伝学専攻を担当し、大学院学生の教育を行う。また、その他の大学の大学院教育に協力する。

国際交流

遺伝学の分野で国際的な学術交流を活発化するため、研究者の交流や国際シンポジウム等を開催する。

事業など

日本DNAデータバンク（DDBJ）や系統保存事業を行い、海外の拠点とも協力して、全国の研究者のための利用に供する。

【沿革】

昭和 24 年、文部省設置法により文部省所轄研究所として、遺伝に関する学理の総合研究及びその応用の基礎的研究をつかさどり、併せて遺伝学の指導、連絡、及び推進を図ることを目的に設置された。その後、昭和 59 年、国立学校設置法により上記の設置目的のもとに大学共同利用機関として改組・転換され、現在に至っている。

【機構】

本研究所は 17 研究部門（うち 5 つは客員部門）と 6 研究施設（17 研究室）を擁し、これに管理部と技術課を加えた機構で運営されている。また、総合研究大学院大学（総研大）生命科学研究科の遺伝学専攻として 5 講座を有し、研究部門や研究施設の教官の一部が分担してこれらの講座を担当している。研究のための施設のほか、講堂、図書室及びセミナー室などを備えているが、特に社会へ教育サービスを行うための附属施設はない。

【学生総数】

平成 13 年 5 月 1 日現在：57 人（総研大博士課程学生 42 人，特別共同利用研究員（他大学大学院生）12 人，

研究生 3 人）

【教職員総数】

平成 13 年 5 月 1 日現在：総数 104 人

所長 1 人

教官 64 人（現員：教授 18 人，助教授 15 人，助手 31 人）

うち総研大遺伝学専攻併任教官 36 人（現員：教授 17 人，助教授 9 人，助手 10 人）

教官以外の職員 37 人（管理部：22 人，技術課：17 人）

このほか客員部門教官 10 人（教授 9 人，助教授 1 人）

【ホームページ】

<http://www.nig.ac.jp/>

教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標

1. 教育サービス面における社会貢献に関する考え方

国立遺伝学研究所は、大学共同利用機関として設置された趣旨及び総合研究大学院大学（以下総研大）遺伝学専攻としての立場から、遺伝学と周辺分野の研究の促進、研究に関わるサービス事業、研究者の育成といった視点から社会貢献活動を行ってきた。すなわち、産官学からの受託研究や共同研究を受け入れ、研究集会やシンポジウムを主催して研究交流を促し、系統保存事業やDNAデータバンク事業において我国の中核的役割を担い、総研大博士課程学生や特別共同利用研究員の教育と研究指導を通じて優秀な人材を育ててきた。

一方、当研究所の組織、設備、予算及び地理的条件などは、社会へ向けて教育サービスを行うには必ずしも適したものとは言えない。しかし、これらの悪条件にも拘わらず、遺伝学の知識を一般社会に普及することが研究所の活性化と遺伝学と周辺分野の発展に必須であることから、積極的に社会に対する教育サービス活動を行ってきた。例えば、定期的に研究所を一般に公開したり、同じく定期的に公開講演会を開催するなど、遺伝学の基礎知識や研究成果を社会に向けて分かりやすく紹介している。研究所の一般公開は、他に大きな大学や研究機関のない静岡県東部の地域社会との貴重な交流の場ともなっている。このような社会へ向けての努力は研究所開設当初から行われており、例えば、研究所設立の翌年（昭和25年）には職員らの支援のもとに財団法人遺伝学普及会（三島市谷田桜ヶ丘）が設立された。当研究所は主に学術面において同会に協力し、月刊誌「遺伝」や多くの啓蒙図書の編集などを通して遺伝学の知識の普及に貢献してきた。その他、教官個人の社会貢献活動として、科学雑誌への寄稿、啓蒙書の執筆、テレビや新聞などのマスコミ取材への対応、研修会や授業への講師派遣及び見学の受け入れなどを積極的に行っている。

しかし、「遺伝子」、「クローン」、「ゲノム」などの言葉が日常の話題にのぼる時代となり、一般社会がこれらの情報を正しく理解し判断するためには、これまでも増して正確で片寄りのない遺伝学の知識を普及させることが必要となってきた。また、若者の理科離れが問題となっており、遺伝学を含む生物学研究の後継者を育てることも社会的要望の一つである。このような要求に従来より一層積極的に応えるべく、研究所は第3期将来計画（1999～2004年）の策定にあたり、「遺伝学研究成果

の啓蒙と普及、中等教育のレベルアップへの協力など社会との接点の重視」を計画の4本の柱の一つとして掲げた。また、研究所創立50周年（平成11年）を積極的に社会との繋がりを深める絶好の機会ととらえ、地元での市民講座や遺伝学電子博物館のインターネット上への公開などを行った。このうちインターネットの活用は、研究所の規模や地理的な条件などの不利を補い、情報技術に優れた研究所の特色を生かすものであり、今後、社会へ向けて教育サービスを行うに当たっての方向性の一つととらえている。このように、当研究所は教育サービス面における社会貢献を重要な課題と認識し、社会の要望を反映しつつ、特色ある活動を行うべきであると考えている。

2. 教育サービス面における社会貢献に関する目的及び目標

(1) 目的

国立遺伝学研究所が社会に向けた教育サービスを実施する上での主要な目的は、科学の進歩に見合った遺伝学知識の一般社会への普及、中高生など若者層に遺伝学の面白さを伝える、地域社会への貢献の3つに大別できる。これらの各目的に沿って教育サービスを提供する上での基本的な方針、提供する内容及び方法の性格及び達成しようとしている成果は以下の通りである。

1) 科学の進歩に見合った遺伝学知識の一般社会への普及

遺伝学の歴史の中で蓄積されてきた基礎知識を提供するとともに、当研究所の研究成果を含めて遺伝学及び関連諸分野における最先端の成果を分かりやすく紹介することを基本的な方針とする。時あたかも「遺伝子治療」、「遺伝子組換え作物」、「クローン動物」、「ヒトゲノム計画」、「オーダーメイド医療」及び「ゲノム創薬」などの言葉が、新聞・テレビ等を賑わせている。このような最先端の科学研究には大いなる期待が寄せられている反面、正確な理解を伴わないために社会不安や混乱を引き起こしかねない状況にある。従って、的確な情報と知識の提供がこれまでに増して重要である。また、社会の高年齢化、国民のゆとり、価値観の多様化に伴って増大している生涯学習ニーズへの対応も必要であり、知識や技術の普及という点では、海外特にアジア諸国へのサービス提供も重要である。

そこで、直接聴衆や参加者と触れあう講演会や市民講座のほか、遺伝学博物館の設立を目指し、啓蒙書などの出版物やインターネットを通じて広く情報を発信する。特にインターネットの活用は、研究所の性格・規模・地理的条件を考えると有力な手段であり、将来はアジア諸国や世界へ向けての情報提供をさらに推進する。このような活動により、一般社会の人々が遺伝についての基本的な知識を身につけ、科学の発展に伴って生じる問題について冷静に考え判断できる状況を作り出すことが、最終的な目的である。もとより、このような成果を得るためには当研究所の力は小さいが、そのような教育サービスや情報発信の拠点の一つとなることを目指す。

2) 若者層に遺伝学の面白さを伝える

「ゲノム」や「バイオ」が今世紀のキーワードとされるなか、若者たちの理科離れが深刻な問題として指摘されており、遺伝学を含む生命科学の将来を担う後継者を育てることは当研究所の社会的な責務の一つである。そこで、大学院生の専門教育だけでなく、大学生・中高生など若者層が遺伝学に興味をもつよう積極的に働きかける。また、理科の教員が最新の知識を得る機会を提供する。そのための方法は、研究所の教官や生物と直接接することでのきる活動のほか、いつでも簡単に若者がアクセスできるインターネットを用いる。前者としては、見学、研究体験、講師派遣の依頼に応えることはもとより、遺伝学博物館の開設、研究所の一般公開等における積極的な展示や実験のデモンストレーションなどがある。教官個人による草の根的な活動も推奨する。一方、インターネットでは、平易に遺伝学の知識を紹介するとともに、遊び的な感覚も取り入れる。このような活動を通して期待される基本的な成果は、ともしれば複雑で難解と思われやすい遺伝学と当研究所を若者が身近に感じ、興味をもってくれることである。

3) 地域社会への貢献

静岡県東部地域には当研究所の他に大きな大学、研究所、博物館などが少なく、従って当研究所は設立以来、地域社会との交流を基本的な方針の一つとしてきた。最先端の研究活動を遂行する上でも、地域社会の理解と協力を得ることが不可欠である。教育サービス活動の基本的な内容と方法は目的1)及び2)のそれと重複するが、特に研究所の一般公開の内容の充実、遺伝学博物館の開設、地元自治体などとの協力による市民講座などの開催、地元の学校及び中高生との交流などを推進する。このような活動を通して、地元から評価され愛される研究所を目指すとともに、生涯学習にも貢献する。

(2) 目標

上記の諸目的を実現するため、下記の具体的な課題を目標として掲げる。(なお、各課題は複数の目的にまたがるので、目的による特定・分類は行わない。)

- 1) 定期的な研究所一般公開の継続実施と内容の充実。
- 2) 東京での定期的な公開講演会の継続開催と内容の充実。
- 3) 遺伝学博物館。最初の取り組みとしてインターネット上に遺伝学電子博物館を開設する。また、実際の博物館設置に向けての活動の開始。
- 4) 研究所ホームページの充実。インターネット上で各研究室の活動や成果を分かりやすく日本語・英語で紹介。
- 5) 一般市民向け講座の開催。地方自治体などと協力して一般市民へ学習機会を提供。
- 6) 講習会の開催。当研究所のもつ技術や設備について、産業界を含めて社会に還元するための講習会を開く。アジア諸国など海外へむけての講習会も行う。
- 7) 所内見学と体験入所者の積極的受け入れ。
- 8) 教官個人による啓蒙普及活動の奨励。地域の学校における授業や講演、一般向け出版物、マスコミへの協力及び遺伝学普及会への協力など。

3. 教育サービス面における社会貢献に関する取組の現状

当研究所が行っている教育サービス面における社会貢献活動は、その実施主体により、遺伝研が行う活動と個々の教官が自主的に行う活動の二つに大別される。以下この二つのカテゴリーに分けて活動の現状を述べる。

(1) 研究所が主体となって行う活動

1-1) 研究所の一般公開

毎年春の科学技術週間に合わせ、土曜日的一天を使い研究所を開放し、展示による研究紹介、遺伝学の啓蒙講演、ビデオ上映などを行うとともに、構内の300品種を越す桜を一般市民に公開している。

1-2) 公開講演会

三島での講演活動だけでなく、毎年秋に土曜日半日をを使い、東京の国立科学博物館へ出向いて講演会を開催している。教官2人が自らの研究紹介をする他、研究所と遺伝学専攻の紹介も行っている。主たる対象は大学生、高校生、学校の教師であるが、一般市民の参加も多い。

1 - 3) 遺伝学博物館

中学生・高校生を含む一般市民に遺伝学の基礎知識を提供するため、平成 11 年度に約 1,000 万円を投じてインターネット上に遺伝学電子博物館を開設した。クイズやアニメなどを取り入れ、親しみやすいフォーマットにするとともに、遺伝子導入作物、個体のクローニングなど社会的に問題になっている事柄の正しい理解を深めるための手助けをしている。開設以来 2 年間で閲覧総数（ページビュー）は既に 100 万件を越えている。また、施設としての遺伝学博物館設立の準備を開始し、資料収集活動を行っている。

1 - 4) 研究所ホームページ

ホームページを通して研究所の概要と各教官の研究活動の紹介及びその成果の公開を行っている。個々の研究室のページは教官にゆだねられている。

1 - 5) 市民・県民講座

地域社会との連携を深めるため、市や県が主催する一般市民のための公開講座に講師を派遣している。特に研究所創立 50 周年を機に、一連の県民講座・市民講座を行った。

1 - 6) 講習会開催

高等学校・中学校の理科の教師、裁判官、アジア諸国の研究者など様々なグループを対象とした講習会を随時開催している。5 年間に 16 回の講習会を開いた。

1 - 7) 施設見学

希望に応じ、随時研究所の施設見学に応じている。5 年間に 12 回の施設見学があった。

以上の教育サービス活動を行うにあたり、研究所が支出できる費用は年間予算約 9 億円の 0.1 % 以下であり、新たな活動のための予算は認められていないのが現状である。遺伝学電子博物館開設などの財源としては、平成 9 年度から開始された「所長のリーダーシップ経費」を利用している。

(2) 個々の教官が自主的に行う活動

2 - 1) 一般向け解説書，教科書などの教育啓蒙のための執筆

5 年間で計 322 報。

2 - 2) 一般向け講演

5 年間で計 61 回。

2 - 3) インタビュー，資料提供などによるマスコミへの協力

5 年間で計 18 回。

2 - 4) 中学校・高等学校における特別授業

中等教育への参加は、最新の知識を若年層に伝える最も直接的な方法である。5 年間に研究所の教官が自らの子供が通う地域の学校で授業をした例は 3 回ある。

2 - 5) 体験入所者の受け入れ

高校生や大学生を数日から 1 ヶ月の間研究室に受け入れ、実験やセミナー参加を行っている。受け入れ教官の負担は大きいですが、入所者の評判は非常に良く、将来の科学者育成にも貢献している。

2 - 6) 遺伝学普及会への協力

遺伝学普及会は、遺伝学に関する学術研究の助成及び知識の普及を図り、学術の発展に寄与することを目的として、設立された財団法人である。所長をはじめとする 9 名の教官が役員を勤める他、多くの教官が雑誌「遺伝」への執筆やデータベース供給などを通じて遺伝学普及会の活動を支援している。

当研究所の教官の任務は研究・専門家教育を通じて社会に貢献することであり、以上に述べた教育サービス活動は本務とは見なされない。また、一般向けの著作は科学者の業績とは認識されないのが普通である。従って、これらの活動は教官の自主性に基づくものであり、研究所は「本務に差し支えがない限り」上述の活動を奨励している。

評価結果

1. 目的及び目標を達成するための取組

国立遺伝学研究所においては、「教育サービス面における社会貢献」に関する取組として、研究所の一般公開、公開講演会、遺伝学電子博物館、市民・県民講座、講習会、施設見学、体験入所などが行われている。

ここでは、これらの取組を「目的及び目標を達成するための取組」として評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

特に優れた点及び改善点等

平成 11 年度にインターネット上に開設した遺伝学電子博物館は、「クイズ遺伝学」、「関西弁電脳紙芝居」、「ゲノムアニメ劇場」などのアニメーションやクイズを活用し、中学生・高校生を含めた一般市民が親しみやすいフォーマットとなっている。また、専門的な研究内容や社会的に問題となっている事柄を分かりやすく、理解を深めるように工夫され、博物館の開設後も改訂を行い、立体視や動画などのビジュアル的な要素を取り入れる努力をしている。

このインターネットを活用した取組は、研究所の規模や地理的な条件を補い、一般市民に遺伝学の基礎知識を提供する特色ある取組である。

また、経費面では、博物館の開設や改訂に所長リーダーシップ経費から費用を負担し工夫している点は、経費の有効活用として優れている。

研究所の一般公開は、実行委員会が組織され、毎年 4 月にほぼ全職員が参加して、テーマ展示による研究紹介、講演会、学術映画・ビデオ上映、資料室の開放、モデル生物観察、簡単な実験及びパソコン操作などの多彩な方策を駆使し、また、来訪者との質疑応答を重視するなど来訪者の理解が深まるように工夫されている。また、公開日を平日ではなく、土曜日にすることにより、地域の人々が参加しやすいように配慮している。

この取組は、展示テーマが毎年同じテーマに固定化しないように工夫する点に改善の余地があるものの、研究所のリソースを生かした特色ある取組である。

公開講演会は、毎年秋に東京の国立科学博物館で継続して行われており、東京まで出向いて開催している点は、聴講者の利便性への配慮として優れている。

個々の教官が自主的に行う活動は、組織的な活動とはなっていないものの、一般向け書籍の執筆、講演会の講師、マスメディアへの協力、中学校などへの特別授業、体験入所者の受入れなどを活発に行い、遺伝学知識を一般社会に普及させることに貢献している点は、優れている。

中学校・高校の理科教諭、公立学校初任者研修生、地方裁判所新任判事などの様々なグループを受け入れて、随時講習会を行っている。

特に平成 10 年度にアジア分子生物学研究機構のアジアの若手研究者を対象としたワークショップトレーニングコースを引き受けて実施した講習会は、海外の研究者に対する遺伝学の知識や研究成果の提供という点で優れている。

研究所が主体となって行う施設見学は、小・中学生、高校生、短大生、海外からの訪問団など幅広く受け入れており、特に青少年に対しては、知識の取得だけでなく、施設見学による研究現場に接することで遺伝学への興味を喚起することに寄与している。

体験入所は、個々の教官が自主的に行い、主に大学生を受け入れており、専門性を高めることに寄与している。

これらの点は、研究所の設備・施設を有効に利用した取組として優れている。

貢献の状況（水準）

取組は目的及び目標の達成に十分に貢献している。

2. 目的及び目標の達成状況

ここでは、「1. 目的及び目標を達成するための取組」の冒頭に掲げた取組の達成状況を評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、目的及び目標の達成状況の程度を「達成の状況（水準）」として示している。

特に優れた点及び改善点等

遺伝学電子博物館は、子供から専門家まで幅広く対応できる内容を提供し、アクセス件数は平成 11 年度の開設以来 2 年間で 100 万件を超え、遺伝学知識の一般社会への普及に関して、高い成果を上げている。

研究所の一般公開は毎年継続して実施され、来訪者数は、平成 10 年度約 6,000 人、平成 11 年度約 2,700 人、平成 12 年度約 3,000 人であり、多くの来訪者を得ている。来訪者は、中学生・高校生を含む地元住民が主であり、地域社会との交流を研究所の基本的方針の一つとしている点から、意図した対象者が得られ、地域社会との交流を果たしていることは評価できる。

毎年東京で開催している公開講演会は、高校生、大学生、一般市民など意図した対象に、最先端の研究成果を公開しているが、アンケート調査からは高校生には内容が難しいとの意見もあり、講演方法や聴講者層に見合った内容の提供などに改善の余地がある。

施設見学及び体験入所者の受入れは、平成 10 年度 5 件、平成 11 年度 4 件、平成 12 年度 6 件と毎年一定の受入実績があり、参加者の満足度は高く、成果を上げている。

達成の状況（水準）

目的及び目標はおおむね達成されているが、改善の余地もある。

3. 改善のためのシステム

ここでは、当該機関の「教育サービス面における社会貢献」に関する改善に向けた取組を、「改善のためのシステム」として評価し、特記すべき点を「特に優れた点及び改善点等」として示し、システムの機能の程度を「機能の状況（水準）」として示している。

特に優れた点及び改善点等

遺伝学電子博物館については、遺伝学博物館委員会が活動状況や問題点を把握し、改善に結びつけている。

創立 50 周年事業や講習会などについては、その都度実行委員会を組織し、運営を担当しているが、活動全般についての状況や問題点の把握は教授会で行い、改善についても教授会で対応している。

これらの点は、活動状況や問題点を把握し、改善に結びつけるシステムとして優れている。

講演会、体験入所、マスコミへの協力、特別授業、一般向け著作など、個々の教官が行う活動は意欲的に活発に行われている。しかし、研究所としてこれらの社会貢献活動を把握し、評価やサポートするシステムが整備されていない点は、改善を要する。

公開講演会など一部の取組については、受講者や参加者から意見の聴取やアンケート調査を行っているが、それらのデータを分析し、その結果を十分に改善に生かす体制が確立されていない点は、改善を要する。

研究所の一般公開については、教職員が個々に来訪者から意見・感想を受け付け、実行委員会で情報を共有しているが、アンケート調査などによる情報の蓄積がなされていない点は、改善を要する。

機能の状況（水準）

改善のためのシステムがある程度機能しているが、改善の必要がある。

評価結果の概要

1. 目的及び目標を達成するための取組

特に優れた点及び改善点等

インターネット上に開設した遺伝学電子博物館は、研究所の規模や地理的な条件を補い、一般市民に遺伝学の基礎知識を提供する特色ある取組である。

研究所の一般公開は、展示テーマの固定化について改善の余地があるものの、遺伝学の理解・共感を深めるように内容が工夫され、研究所のリソースを生かした特色ある取組である。

公開講演会は、毎年継続して開催されており、東京まで出向いて開催し、聴講者の利便性に配慮している点は、優れている。

個々の研究者が自主的に行う活動は、意欲的に活発に行われており、遺伝学知識の一般社会への普及に貢献している点は、優れている。

中学・高校の理科教諭など様々なグループを対象として講習会を実施し、特に、アジアの若手研究者を対象とした講習会は、海外に対する研究成果の提供という点で優れている。

施設見学、体験入所は、中・高校生、大学生など様々なグループを幅広く受け入れ、遺伝学への興味の喚起や専門性の向上に寄与している点は、優れている。

貢献の状況（水準）

取組は目的及び目標の達成に十分に貢献している。

2. 目的及び目標の達成状況

特に優れた点及び改善点等

遺伝学電子博物館はアクセス件数が多く、遺伝学知識の一般社会への普及に関して、高い成果を上げている。

研究所の一般公開は、毎年継続して実施され、地域住民を主とする多くの来訪者を得ており、地域社会との交流を果たしていることは評価できる。

公開講演会は、高校生、大学生など意図した対象に行っているが、高校生には内容が難しいとの意見もあり、講演方法や講演内容に改善の余地がある。

研究所の施設見学及び体験入所者の受入れは、毎年一定の実績があり、参加者の満足度は高く、成果を上げている。

達成の状況（水準）

目的及び目標はおおむね達成されているが、改善の余地もある。

3. 改善のためのシステム

特に優れた点及び改善点等

遺伝学電子博物館など組織的に実施している取組の活動状況や問題点を把握する体制は整備され、教授会などで問題点を改善に結びつけている点は優れている。

教員個人の社会貢献を把握し、サポートするシステムが整備されていない点は、改善を要する。

受講者や参加者に対するアンケート調査などのデータを収集し、その結果を改善に生かす体制が確立されていない点は、改善を要する。

機能の状況（水準）

改善のためのシステムがある程度機能しているが、改善の必要がある。